2011.8.25
vol.13

『キリマンジャロの雪』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

キリマンジャロ

キリマンジャロはアフリカ赤道近くに位置し、5,895mのアフリカ最高峰の山である。アフリカと云えばケニアを思い浮かべるが、現在はタンザニア北東部に属している。キリマンジャロの発見当時はイギリス領ケニアに属していたが、1885年ベルリン会議にてドイツに割譲され、そののちドイツからの独立によってタンザニアに属することになった。

7月28日NHKBSで「キリマンジャロ、赤道直下の白い山」が放送されました。1920年に撮影されたキリマンジャロの山頂には氷河がひろがり、真っ白の山だったが、今回の登頂シーンでは白い氷河がまだらに残っているのみで、最近は加速度的に氷河が減っているとのことであった。そして、この映画のタイトルに有る「山頂に白く輝く雪」も、地球温暖化の影響を受け、2020年には消失するのではないかと危惧されている。　au

映画を観て

アフリカ・キリマンジャロの麓で、脚の壊疽(えそ)で瀕死の状態にあるハリーは自身の人生を振り返り、4人の女性とのロマンスを思い出す。印象的なシーンとして、酒場の片隅で一本の煙草で火をつけ合うハリーとシンシアとの出会い。そして、アフリカのサファリ・パリ・スペインでの想い出と、スペイン内戦の義勇兵に志願したハリーが看護婦をしていたシンシアとの再会そして別れ。

私が観賞後に感じた事は、シンシアとリズとの成り行きは判るが妻のヘレンの過去が判らない事と、題名と映画の内容がしっくりしない事でした。そこで、世界文学全集の「キリマンジャロの雪」（訳者大久保康夫、河出書房発行）を読みました。

小説の冒頭は、“キリマンジャロは高さ19,710フィート(6,000メートル強)の雪におおわれた山で、アフリカ大陸の最高峰といわれている。この西側の頂上に近く、ひからびて凍りついた一頭の豹の死体が横たわっている。こんな高いところまで豹が何を求めてやってきたのか、誰も説明したものはいない。”という有名な言葉から始まる。

ヘレン(スーザン・ヘイワード)については、“若い時分に夫が亡くなり、しばらくは発育ざかりの二人の子どもに身をうちこんだ。やがて子どもたちは彼女を必要としなくなり彼女がそばにいるのを迷惑がるようになり、ウイスキーを頼るようになった。射撃が上手で親切な世話やきで、このおれを作家として、男として、道ずれとして、自慢の財物として熟愛してくれた。”と書かれていた。　S.N

http://www.google.co.jp/

原作と映画化について

ヘミングウェイがこの映画の原作を書いたのは1936年。映画化は16年後の1952年。ほぼ同時代に書かれた「武器よさらば」と「誰がために鐘は鳴る」の映画化は、それぞれ3年後、2年後です。それだけ、「キリマンジャロの雪」の映画化は難しかったのでしょう。原作は、アフリカ旅行中に予期せず瀕死に陥った小説家の会話と内的独白をつづった作品ですが、内容が極めて内面的かつ短く、ハリウッドでの映画化は困難だったと思われます。

ヘンリー・キングは、原作の会話部分を現在進行形シーン、内的独白の部分を回想シーンとし、回想シーンに様々なヘミングウェイ的エピソードを追加・再構成して、当時のハリウッドのビッグ・スターが競演するメロドラマ大作に仕立て上げました。映画は大ヒットしたそうです。

私の第一印象は、特に重厚な人間ドラマが展開される訳でも、ドラマチックな展開が続く訳でもなく、淡々と主人公の過去と現在がカットバックで交錯しているだけなのに、不思議な重みがある作品だなぁという感じでした。すっと通りすぎることが出来ず、原作を読み返したり、何度もDVDを見直したり、あまり予備知識のなかったヘミングウェイの年譜を勉強したりと、しばしヘミングウェイに立ち止まる見方を楽しみました。

映画的に一番引き込まれたのは、ベニー・カーターのメローなアルト・サックスが流れるパリの酒場の片隅での、ペックとガードナーとの出会いのシーン。それからもう一つ、とても興味深かったのは、原作の冒頭に提示される象徴的なエピグラム『キリマンジャロの豹』の映画の中への取りこみ方。ヘンリー・キングは、原作には全く存在しない「主人公の伯父ビル」という人物を登場させて、遺言として『キリマンジャロの豹』のメモを主人公に託すという場面を作り、この一見メロドラマ作品にヘミングウェイの文学的香りを加えるという工夫をしているところです。ちなみに、伯父ビルがこのメモを挟んでヘンリーに渡した本の題名は『ルーアンへの道』。著者名が、主人公の名前「ハリー・ストリート」となっていました。ルーアンはフランス西部のノルマンディー地方の町で、あのジャンヌ・ダルクの殉教の地です。この本が一瞬クローズアップされるカットは、ヘンリー・キングにとってはかなり重要な部分ではなかったかと思います。

ヘミングウェイは、この映画公開の9年後、ノーベル文学賞授与の4年後の1961年に、幼少時から慣れ親しんだ猟銃で、自らの頭をぶち抜き悲劇的な最後を遂げますが、『キリマンジャロの豹』と『ルーアンへの道』は、この最期を暗示していたように思えてなりません。

蛇足ですが、このビル伯父を演じたレオ･G･キャロルは、ヒッチコック作品でヒッチコック自身以外では最も多数回出演しているなど、とても有名な脇役さんです。昨年4月にシネマ・ド・りぶらで上映した『嵐が丘』でも、ヒースクリフの館の下男「ヨーゼフ」を演じていました。　K.M.

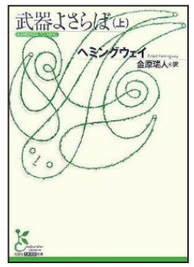
観てから読む？

読んでから観る？

『武器よさらば』

公開年　：1933年
上映時間：150分
監督：フランク・ボーゼージ
出演：ゲイリー・クーパー
　　ヘレン・ヘイズ
　　アドルフ・マンジュー
　　メアリー・フィリップス

第一次世界大戦さなか、イタリア軍に従軍したアメリカ人青年とイギリス野戦病院の看護婦が恋に落ちる様を描く。日本公開当時、「武器よさらば」が反戦的でよろしくないとされ、内務省当局より「戦場よさらば」に改められ様々な箇所がカットされて公開された作品。



『誰がために鐘は鳴る』

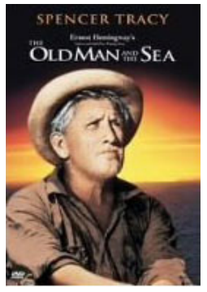
公開年　：1952年
上映時間：130分
監督：サム・ウッド
出演：ゲイリー・クーパー
　　イングリッド・バーグマン
　　エイキム・タミロフ

舞台は内乱下のスペイン。反ファシスト政権の活動に身を投じていたアメリカ人、ロベルトは、敵の輸送路を断つために山間の鉄橋爆破計画に参加する。そこで出会った美しい娘、マリアと恋に落ちる。同志のなかの不審な動き、計画を察知したと思われる敵軍の偵察、ロベルトは作戦中止の書面を連絡員に託すが、時すでに遅く…。

『陽はまた昇る』

公開年　：1957年
上映時間：135分
監督：ヘンリー・ハサウェイ
出演：タイロン・パワー
　　エヴァ・ガードナー
　　メル・ファラー
　　エロール・フリン

1922年、第1次世界大戦後のパリ。そこには戦傷で性的不能となったアメリカ人記者ジェイクなど、戦争で傷ついた“失われた世代”が集い、享楽と虚無の入り混じる生活を送っていた。やがてジェイクはスペイン旅行へと赴き、闘牛や舞踏で沸き立つフィエスタ＝祭礼の1週間、まるで徒花のような女と男の愛憎のドラマの幕が開ける…。



『老人と海』

公開年　：1958年
上映時間：87分
監督：ジョン・スタージェス
出演：スペンサー・トレイシー
　　フェリッペ・パゾス
　　ハリー・ビレーヴァー

老人はメキシコ湾で少年を伴い、漁師を営んでいた。少年は老人を尊敬し愛していたが、40日間不漁が続いた為に、親のいいつけで別のボートで漁を手伝う事になってしまう。それでも老人は毎日一人で漁に出る。そんなある日、老人は仕掛けた網に信じられない程の重さを感じる。その瞬間、網にかかったカジキと老人の4日間にわたる死闘が始まった…。

『キリマンジャロの雪』フィルムデータ

原　題　：The Snows of Kilimanjaro
製作年　：1952年
制作国　：米国
上映時間：114分　カラー

監督：ヘンリー・キング
原作：アーネスト・ヘミングウェイ
脚本：ケイシー・ロビンソン　　音楽：バーナード・ハーマン
出演：グレゴリー・ペック、スーザン・ヘイワード、
　　エヴァ・ガードナー、ヒルデガード・ネフ

りぶらサポータープロジェクト　「シネマ・ド・りぶら」

『キリマンジャロの雪』 関連図書案内 & DVD

映画関連

778.2　山田 宏一　草思社
『何が映画を走らせるのか ?』

778J・E・ウェイン　講談社
『エヴァ・ガードナー 美しすぎた女の一生』

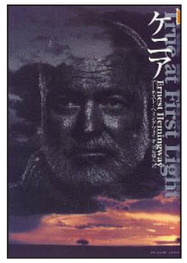
N 778.2　白石 顕二　柘植書房新社
『アフリカ映画紀行』

778.2　ヘンリー・キング監督
『慕情』DVD

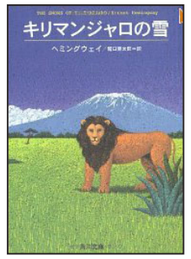
778.2　エリア・カザン監督
『紳士協定』DVD　グレゴリー・ペック主演

ヘミングウェイの作品

933.7　ヘミングウェイ　アーティストハウス
『ケニア』



B 933.7　ヘミングウェイ　角川文庫
『キリマンジャロの雪 』



933.7　ヘミングウェイ ヴィレッジブックス
『in our time』

スペイン内戦

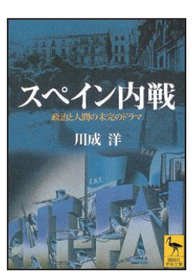
933.7　船山 良一　彩流社
『ヘミングウェイとスペイン内戦の記憶』

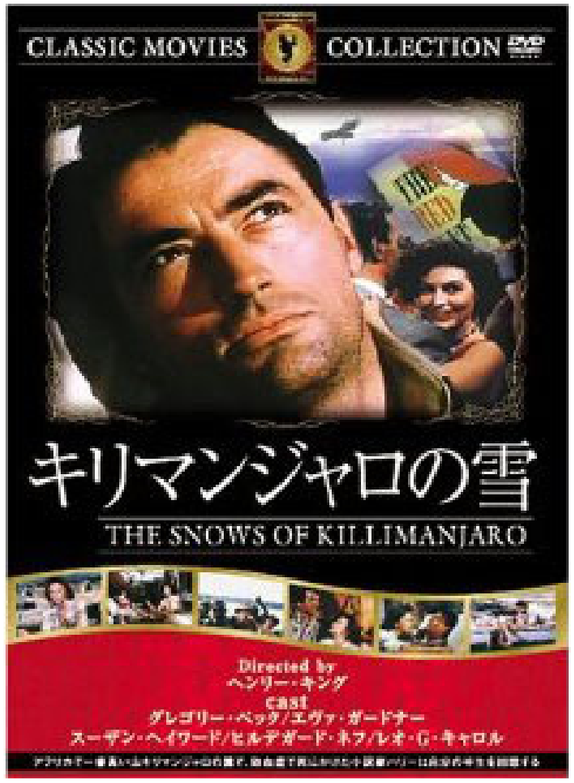
236.0　碇 順治　彩流社
『現代スペインの歴史』

236.0　川成 洋　人間社
『スペイン歴史の旅』

236　川成 洋 河出書房新社
『図説スペインの歴史 改訂新版』

B 236.0　川成 洋　講談社学術文庫
『スペイン内戦 政治と人間の未完のドラマ』

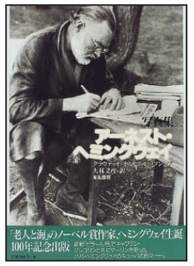


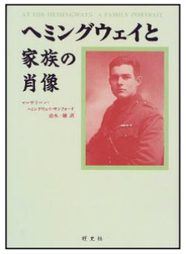


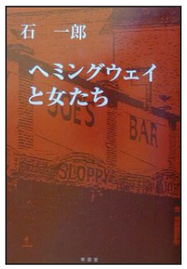
音楽・環境

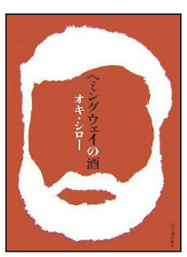
2B　カーター・ベニー　Contemporary Records
『スインギン・ザ・トゥエンティーズ + 3』

I 519.2　石 弘之　岩波新書 新赤版
『キリマンジャロの雪が消えていく』





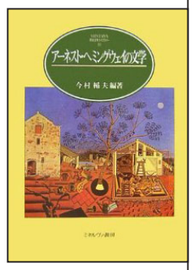




ヘミングウェイの周辺

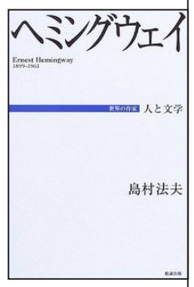
930.2　海風書房
『アーネスト・ヘミングウェイ 写真集』
クラウディオ・イスキエルド・フンシア

930.2『ヘミングウェイ・アドベンチャー』
マイケル・ペイリン　産業編集センター



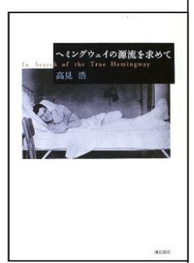
930.2 今村 楯夫　求竜堂
『ヘミングウェイの海』

930.2　山口 淳
阪急コミュニケーションズ
『PAPA&CAPA ヘミングウェイとキャパ』



930.2　今村 楯夫　ミネルヴァ書房
『アーネスト・ヘミングウェイの文学』

930.2　島村 法夫　勉誠出版
『ヘミングウェイ (世界の作家)』



930.2　マーサリーン・ヘミングウェイ・サンフォード　旺史社
『ヘミングウェイと家族の肖像』

930　マドレイン・ヘミングウェイ・ミラー　新書館
『アーニー 少年時代のヘミングウェイ』

930　レスター・ヘミングウェイ　みすず書房
『兄ヘミングウェイ』

930.2　オキ シロー　河出書房新社
『ヘミングウェイの酒』

930.2　高見 浩　飛鳥新社
『ヘミングウェイの源流を求めて』

930.2　丸田 明生　国書刊行会
『ヘミングウェイの女性たち 作品と伝記の間』

930.2　石 一郎　南雲堂
『ヘミングウェイと女たち』

930.2　日下 洋右　彩流社
『ヘミングウェイヒロインたちの肖像』